

竹本綾之助

長谷川時雨

青空文庫

泰平三百年の徳川幕府の時代ほど、義理人情というものを道徳の第一においたことはない。忠の一字をおいては何事にも義理で処決した。武家にあつては武士道の義理、市井しせいの人には世間の義理である。義理のためには親子の間の愛情も、恋人同士ほとばの迸はしるような愛の奔流も抑圧してきた時代である。その人情の極致と破綻たんと、抑おさえつけられた胸の炎と、機微な、人間の道の錯誤を語りだしたのが義太夫節ぎだゆうぶしで、義太夫節は徳川時代でなければ、産れないもので他の時には出来ないものだ。というのは、武士道からきた道徳と、儒教からきた道徳と、東洋の宗教が教えた輪廻りんね説あきらの諦めとが、一つの纏まとめられた思想が、その語りものの経たての太い線に

なっている。その上に、義太夫節の生れた徳川氏の政府の最初に近い年代は、一面に長らく続いた戦国の殺伐で豪放な影がありながら、一面には世の中が何時も春の花の咲いているような、黄金が途上にもぎくぎく零れていければ、掘井戸のなかからも湧いて出るといったような、豪華な放縦な、人心の頹廢しかけた影も射しそめていた。その上に人斬り刀を横たえて武士は市民の上に立ち、金はあつても町人は、おなじ大空の月さえ遠慮して見なくてはならないほど頭があがらなかつた。その時勢に、新江戸の土くさい田舎ものいなかのずぶとさと反撥力はんぱつりよくをもつた、新開の土地などでは見られない現象を、古い伝統をもつ大都会、浪花の大阪の土地に見たのは当然の事であつたらう。

経済都市大阪のぼんちは、酒と女の巷ちまたへ、やりどころのない我わ
がまま儘と、頭の廻めぐらしようなない鬱うつぶん憤ふんを、放ほう埒らちつな心に育てて派
 手な場処へと、豪華を競いに行ったが、家にかえれば道徳の人情
 責めと、いわゆる世間の義理とが、小むずかしく、光った頭のち
 よんまげ鬻うと、背中を丸くして目を摺すり赤めた老婆の涙が代表して待
 構まえていた。そしてぼんちは強い刺戟しげきに爛ただれた魂を、柔かい女の
 胸の中に、墓場たすに探たずねあてて死んでいった。

そうした義理人情の葛藤かっとうと、武家の義理立ての悲劇を語りも
 のにしたのが義太夫である。であるから、節ふしであり、絃奏をもつ
 たものでありながら、義太夫は他の歌とはちがって唄うたうものでは
 ない、語りものである。現われる人物の個性を、苦悩を語り訴え

るのである。

竹本義太夫がその浄瑠璃節じょうるりぶしの創造主であるゆえに義太夫と唱え世に広まった。またその当時人形操りあやつには辰松八郎兵衛、吉田三郎兵衛などが盛名を博し、不世出の大文豪、我国の沙翁さおうと呼ばれる近松門左衛門ちかまつもんざえもんが、作者として名作を惜気おしげもなく与え、義太夫に語らせ、人形操りあやつの舞台にかけさせた。そして近松翁が取りあつかった取材は、その多くを当時の市井の出来ごとから受入れている。そうして義太夫節は大阪に生れ、大阪に成長し、語る人も阪地はんちの生れを本場とし、修業もその土地を本磨きとするのである。

わが竹本綾之助たけもとあやのすけ、その女ひともその約束をもつて、しかも天才麒麟き

麟児りんじとして、その上に美貌びぼうをもつて生れた。私は綾之助を幸福者だと思ふ。何故なぜそういうかといえ、綾之助の現今は三人の娘の母親として、夫には長い年月の間も、最初にかわらぬ恋人として、家庭の中なか軸じくとなっている。三人の娘は、さだ子、いと子、ふじ子とよんで、母の美しさと父の秀ひいでたところをとつて生れた。姉は高女をこの三月に卒業し、中なかのいと子は実科女学校に学ばせている。綾之助は芸にも自家じかの見けんを立てているように、子女の教育の上にも一家の見識を持つている。娘たちの長所短所を見分けて、学ぶところを選ませている。家庭では、女中のする仕事をわけてさせ、娘たちを一人前の婦人とすることに腐心している。それは彼女が、彼女のあの名高かつた盛時の芸名を、美しい娘の三人を

も持ちながら、どの子にも伝えようとしのないのにも、操持そうじの高いことが窺うかがわれる。彼女にはそうした満足と誇りがあり、そして家庭は、彼女の収入を煩らわさないでも、子供を教育していかれるだけの夫をもっている。それは女芸人とよばれる仲間ではめずらしいことなのだ。今年ことし——大正七年に彼女は四十四歳になるが、この上の平和と幸福とは重なるうとも、彼女の身边に冷たい風のせま逼せまろうはずはない。私が彼女は幸福だといつても、錯あやまつた事ではなからうと思う。

彼女には上なき誇りがも一つある。それは童貞同士の恋人で、初恋の夫妻であるという、これも芸の人にはめずらしいことといわなければならぬ。三人の母の彼女の至上の宝は夫であり、彼

女の夫の無上の満足は妻としての彼女を持つことだが、そのためには幾人かの犠牲者に、同情するひまも、一滴の涙もこぼしてやる余裕もなかった。俊敏な綾之助は、盛名を保つに聡さとかつたであろうが、綾之助を情にもろくまけない女に教育したのは、七歳の年から無心で語っていた義太夫節が、知らず知らずの間に教えた強いものが、綾之助の心の底に生れつきのように根をはっていたのでもあろうと考える。

大阪南区畳屋町に鏝かざりや屋げんべえの源兵衛という人があつた。その人の父親は、石山新蔵という、大阪の江戸堀蔵屋敷詰くちやしきづめの武家であつたが、源兵衛は持つて生れた気負い肌はだが、侍をやめて、維新の新

政を幸いに気軽く職人になつてしまつたのだつた。大酒家たいしゆかではあり、居い候そうろうは先方がいるなり次第に置きほうだいであつたその人の、綾之助は三女に生れ、本名はお園さんである。

源兵衛の妹のお勝さんという伯母おばさんが、お園を貰もらつて育て、後年の綾之助に仕立て、自分は三味線ひきになつて鶴勝つるかつと名乗り、綾之助の今日ある基礎をつくつたのであつた。孀やもめのお勝も源兵衛の妹だけあつて気性の勝つた人で、お園が男のように竹馬に乗つたりして遊ぶのを叱言こいごともいわずに、五分刈ぶの男姿にしておいた。町内の者がお園のことを男おんなと呼ぶのを、知つていても知らぬ顔をしていた。

新町の畳屋の近所に男義太夫の新助というのがあつた。お園が

七ツのおりにその新助が「由良の港の山別れ」を教えた。ある折、一段語りおえて、親たちを嬉しがらせたあとで、

「御褒美ごほうびのかわりにお酒が飲みたい」

といつて、七歳のおそのやんが生一本の灘なだの銘酒を五合ばかり飲んで、親たちや養母を驚ろかせたりした。

新町のある茶屋に、素人しろうと義太夫の稽古会けいこがあつた。素人とい

つても、咽喉のどからして義太夫そのものに合つた音声を持つ土地ではあり、ことに土地で生れた芸ではあり、父祖代々、耳に親しんできた馴染なじみの深い、鍛錬のある人たちのあつまりのこととて、到底よその土地の旦那芸とは一つにならない人たちのあつまりであると同時に、こればかりは、何処どこでもかわらない自慢天狗てんぐの旦那

芸の集りであつた。後見役こうけんやくには師匠筋の太夫、三味線弾ひきが揃そろつて、御簾みすが上るたびに後幕うしろまくが代る、見台けんたいには金紋が輝く、湯呑ゆのみが取りかわる。着附きつけにも肩衣かたぎぬにも贅ぜいを尽して、一段ごとに喝采かつさいを催促した。其処そこへ平日着ふだんぎのまま飛込んだのが、町内の腕わ白者男んぱくものおんなで通るお園であつた。自分も一段語りたといつた。人々は面白がつて子供にからかつて、

「そんなに仲間入りがしたければ、三味線弾きをつれておいで」といった。お園は早速あたり四辺を見廻して、一人の師匠を指さした。その人はにこにこして「鈴が森」を弾いてくれたが、それは誰あろう当時の名人たけもとすみたゆう竹本住太夫であつた。住太夫はお園の胆気たんきと、語り口の奥床おくゆかしいのに打込んで、これこそ我が相続をさせる者

が見つかったと悦よろこんだ。もとより男の子だとばかり信じてしまつたので、何でも養子に貰もらいたいとお勝を困らせたが、女だと分ると非常に失望して悔くやしがった。けれどもそれから心を入れて教え導ななつびいた。それも七歳のこと。

お園は明治八年の六月の生れで、初夏の、澆はつらつ刺とした生れだちである。養母のお勝も気が勝っている、その上に、女中がわりに人形あやつ操りの山本三の助というものの母親がいた。その女が東京へ出ることになつたおり、お園親子にも上京を勧めた。それが綾之助となる動機——振りだしで、お園が十一歳のおりのことである。日本橋久松町に住む近親をたよつてゆくと、その人が知しりあ己いを招いてお園の浄るりを聞かせた。それが東京での封切りであつ

た。その折、市村座の座主がお園に目をつけ説きすすめて、芸の人として立たせる第一歩の導きをしたのである。お園は竹本玉之助となり、浅草さくらわかしゅう猿若町さるわかちょうの文楽座に現われることになった。真打ちはその頃の大看板竹本きようし京枝きようしであつた。

明治十八年——世にいう鹿鳴館ろくめいかん時代である。上下こぞ挙つて西洋心酔となり、何事にも改良熱が充満していた。京枝一座も御多分ごたぶんに洩れもず、洋装で椅子いすにかけ卓テーブルにむかつて義太夫を語つた。そんな変かたちちきな容も流行といえこっけいば滑稽には見えかえず、かえつて時流に投じたものか連日連夜の客止めの盛況であつた。が、勇みたつた玉之助のお園の初目見はつめみえ得は、思いがけぬ妬ねたみを買つた。京枝の弟子の竹子は、かなりの人気者であつたが、玉之助が出現して、麒麟

麟児の名を博してからは、月に光りを奪われた糠星ぬかぼしのように影が薄くなつてしまつた。それかあらぬかこの大入りの興行が、突然何の打合せもなしに、狼藉あわてふためいて興行主から中止されてしまつた。それは太夫元がふと恐しい密謀を洩れ聞いたので、前途のある玉之助のために、実入りみいのよい興行を閉場とじてしまつたのであつた。それは、その日の玉之助の高座に用いる湯呑のなかへ、水銀を白湯さゆにまぜておくという秘密を知つたからだつた。

そんな事がかえつて玉之助の名を高く揚げさせた。玉之助は子供心にも師に附かなければならないと考え、故人綾瀬太夫のもとへ弟子入りをした。何という名を与えようかと師匠が考へている

うちに、お園は自分で綾之助と名附けたと言出した。このまけぬ
気の腕白者は、出京早々から肩を入れてくれた久松町の医者某が、
大連たいれんを催してくれた夜に、語りものの「鎌倉三代記」を絶句し
て高座に泣伏してしまった。全く彼女の記憶力は強かったので、
彼女は無本むほんで語り通していたのであった。

十二歳の春には、もはや真打しんうちとなるだけの力と人気とを綾之
助は集めてしまった。綾之助のかかる席の、近所の同業者は、八
丁饑饉ききんとってあきらめたほどであった。新川しんかわのある酒問屋の
主人は鼻屑ひいきのあまり、鉄道馬車へ広告することを案じだした。そ
れも多くの人目をあつめたに違いなかったが、初真打はつ綾之助に贈
られた高座の後幕うしろまくは、とうてい張りきれぬほどの数であった

ので、幾枚も幾枚も振りおとして掛けかえた。役者の似顔絵で知られていた絵えぞうし双紙ふたじやの、人形町の具足屋ぐそくやでは、「名物人気揃」と題して、人にんじょう情じょう咄ばなしの名人三遊亭さんゆうてい円えんちよう朝あさや、大阪初登り越路こしじ太夫たゆう（後の撰津大掾せんつのだいじよう）とならべて綾之助の似顔を摺すりだした。

——綾ちゃんは今おとな年十二はだしだが大人も跣足はだしの巧者で真に麒麟児

だね——

との小書こがきがつけてあつた。

そうするうちに五分刈の綾之助は稚子鬘ちごまげになつた。また男鬘になつた。十四、十五と花の荅つほみは、花の盛りに近づいていった。明治廿三年には十六歳となつた。女義界の綾之助は桜にたとえられた。それと同時にこれも売出しの若手に越子こしこは藤の花、やはり男

鬻このと小土佐は桃の花と呼ばれ、互ひに妍けんを競い人気を争つた。学生
の仲間にも鼻ひ肩しきがつくる各党派があつた。綾之助党は三田の慶応
義塾と芝の攻玉舎こうぎよくしゃの生徒が牛耳ぎゅうじをとつていた。それが今日
の堂摺連どうするれんの元祖である。

聞くとところによると三田の堂摺連の元祖は、同塾の秀才であつ
た坂本易徳氏だということである。氏はいまこそ文壇のよたをも
つて名が通り、紅蓮洞くれんどうの名は名物とされているが、狷介不羈けんかいふき、
世すを拗すねたぐれさん以前にも、新派劇、女優劇と、何処の芝居の
楽屋にも姿を現す、後日の素質は含蓄かっくされていたものと見えて、
この人が綾之助を三田党の随喜渴かつこう仰かの的に推称したということ
である。すれば、綾之助には紅蓮洞氏が結ぶの神でなくてはなら

ない。恋人であり夫である石井健太氏は、紅蓮洞氏が率いた三田党の出身であるから——けれど、ぐれさんに言わせれば「三田の堂摺どうするではない、俺おれは天下の堂摺だ」と大語するかも知れない。

堂摺連は自分たちが推称する女王のかかる席へは、道を遠しとせず出かける。雨も、雪も、熱血漢の血を冷すには足りない。ふところ懐のさびしいのは隊を組んで歩いて廻る。もすこし熱狂に近いのは女王の車へ随従して車で乗廻す。それよりも激しいのは人力車くるまの轆ながえにつかまったり後押しをしたり、前へ立って駈出していったりする。高座に渴仰の的が姿を現わすと、神妙に静まりかえつて、邪魔にならぬほどのよい機おりを見て、語り物の乗りにあわせて、下げ足札そくふだで拍子をとり、ドウスル、ドウスルと連発する。けれども

そういう連中は割合に淡泊であつた。

綾之助の人氣は絶頂ともいつてよいほどに、彼女が十八、九になると満都に響きわたつた。いうまでもなく彼女の人氣は平民的で広がつた。名高い芸妓などの名は、きいていても青年が眺める花ではないが、綾之助の場合は氣樂で、そして語りものを通して一種の親しみをもつことが出来る。それが彼女のために日に日に新らしい信徒をむかえたのもあつたらう。そうなると勢い綾之助には迷惑な殉教徒が出てきた。彼女に熱心のあまり免職される若い巡査もあれば、母親の留守に自殺しようとした小心の書生もあつた。その他にも切腹しかけた人があつて、その人の母親は^{せがれ}忒のために綾之助に懇談を申入れたことさえあつた。ある三十

男は氣が変になつて、いつも赤いハンケチを持ち、においぶくろ 匂袋をさ

げて綾之助の後をついて歩いた。その人はいつも五行本の書風に
真似まね、文句も淨るり節ぶしの手紙を、半年のうちには百数十通おくれた。

綾之助の夫石井健太は、まだ三田に在塾のころ、十二歳からの
彼女の姿を知っていた。卒業の後三田のち 聖ひじりざか 坂に一戸をかまえて、

横浜のある貿易商につとめていた。石井氏が綾之助を愛いとしんだの

は、恋ではなかつたが、綾之助は世よごころ 心がつくにしたがつて、こ

の人にこそと思ひそめたのであつた。綾之助が十九の春は、彼女

にとつて忘れかねる、匂いこまやかな霞かすみの夜であつたらう。廿六

の彼は、初めて彼女の志を入れ、終世を共にする誓ちかいを結んだのだ

が、成恋の二人の間には、惨いたましい失恋の人があつて、その人の誠ま

心ごころが綾之助の幸福のために仲人となつてくれたのだつた。

その人は石井氏の友達の弟であつた。綾之助を恋したために落第も二、三度した。机の上の洋燈ランプの笠かさには彼女の名が黒々と書かれ、畳の上に頭をかかえてころ転げ廻る彼は、

「日本中の者が死んで、俺おれと彼女と二人ぎりになればよい」

とつぶ呟やきくらしていた。ある夜、石井氏と一緒に綾之助のかかる席へゆくと、綾之助は石井氏を木戸口に待ち迎えていて、氏の好みを聞いてその夜の語りものを改ためたりした。それを見て綾之助の心を悟つた彼は絶望のあまり、冬の夜を一夜、品川海岸をさま迷つていたこともあつた。その死にもしかねぬ彼の恋が綾之助の偽手紙にせをつくつて石井氏の心を試ためした。

それが二人を結びつける強い綱になったのだった。苦悶くもんは彼をたかめて、綾之助を失意のものにさせまいと、優しい思いやりまでして、彼は石井氏の両親が選んだ娘のあつたのを、破約にさせるように骨を折った。そんなことがちらちらと噂うわさに立つと、綾之助の高座へ悪戯いたずらをするものが出来た。石井氏の名を知つて害めあやようとする者などもあつた。養母の鶴勝を煽おだてるものもあつた。石井氏は後日の健全な家庭をつくるためにと、綾之助を慰めておいて、雄々おおしくも志望を米国へ伸のばしに渡つた。綾之助はその留守をどうして暮したのであろう、彼女は派手な芸人の上に、日の出の人気の花形である。あらぬ噂も立つ、またその上に大阪役者の中村芝雀しばじやく（後に雀右衛門）を従いとこ兄妹にもつていたので、東上の

おりには、引幕を遣つたり見連を催したりする、彼女の生活の色彩は、いよいよ華やかであつた。けれどそれは表向きだけで、彼女は健太氏の帰朝を一日も長しと待ちわびていた。彼女は未来の夫のために便船ごとに出す手紙を、忙しい間にかかさずに書いた。笑われまいために学びもした、裁縫などもならつた。昔日の「男おんな」はすっかり細君氣質になつていた。

五年ぶりに成功して帰朝した石井氏を、廿三歳の豊麗な彼女が迎えた。養母の鶴勝はその悦びを共にすることを得ず、もはや鬼籍にはいつていた。二人の心は一日も早くと焦燥りはしたが、席亭組合の懇願もだしがたく、綾之助の引退は一ケ年の後に延引された。全くその頃は綾之助が出ると、投げ下足というほど、席亭

の手が廻りかねる大入はんじよう 繁昌はんじよう だつた。石井氏が帰つてきてから何よりおかしがられたのは、（取消し屋の綾之助）といわれるほど克明に、制限なく新聞へ載せられる誤聞を、一々取消させないではおかなかつたことだ。

人世あらしの嵐——この二人の上にも、ふと曇つた影がさしたこともあるにはあつたが、それは世間の面白がり、待ちかまえていた二人の心の溝みぞではなく、愛の結晶の長男を早世させたことと、明治卅三年頃の相場の不況に失敗し、二女をかかえて洗い晒さらしの浴ゆ衣かた一枚になつたことだつた。その当時こそ多少陰惨の影はもつて来たものの、かえつて二人の心はぴつたりと合ひ、綾之助貞淑の床しい語り草とも残された。卅七、八年の日露戦争ごろには、芽

を出して、家庭は豊かになった。綾之助はこのおりこそと木戸銭がわりに手拭てぬぐい二筋ずつ客に持つてきてもらう演芸会を開き、二日間に二万本を集め得て恤兵部じゅっぺいぶにおくつた。

時の歩みの早さ、家庭にかくれた綾之助に十年の月日は経つた。四十二年の二月に女義界の紛擾ふんじょうの仲裁にたつた羽目から、睦むつみ、正義の両派によらず独立して芸界に再来することになった。時の進むことの早さ、綾之助の堂摺連どうするれんはみんな紳士中産階級以上の人になり、時世の潮流もおしなべて向上した。再起の綾之助の語り口も、以前の浮気な人気ではなく、完まったく価値あるものとして価値ね附うちけられ、真に噛かみわけた人生の味を、期待された。

——大正七年四月——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1918（大正7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竹本綾之助

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>